

リ・モンスター
Re:Monster
金斬兎狐 Kanekiri Kogitsuno 7

少年騎士

お転婆姫につき従い、
振り回される苦勞人。
一途な頑張り屋。

ミノ吉

雷牛帝王・超越種となった
オバ朗の親友。
超重量級の身体と武具により、
圧倒的な実力を誇る。

お転婆姫

シュテルンベルト王国の王女。
線の細い見た目に反して、
性格は相当わがまま。

カナ美

アポ朗と共に生まれ育った
仲間にして正妻。
現在の種族は氷血真祖・
超越種。

赤髪ショート

赤髪カトリードマーク
の元冒険者。
オバ朗との間に娘の
オプシーをもうける。

女武者

別世界からの来訪者である
【異邦人】。意外な商才で
アポ朗を助ける。

復讐者

故郷を滅ぼされた【陽光の勇者】。
復讐の為にオバ朗の配下となる。

アポ朗

ゴブリンに転生した主人公。
アブノーション^{アブノーション}
(吸喰能力)によって、
喰えば喰うほど強くなる。
現在は金剛夜叉鬼神・
現神種に【存在進化^{ランクアップ}】している。

Main Characters

主な登場人物

目次

本編
7

番外編
来竜の言は魔獣に届く
267

本編

《二百五十六日目》

【神】級の【神代ダンジョン】である【フレムス炎竜山】を無事に攻略した俺——アポ朗は、昨夜なんやかんやあつた末に、三大欲求の一つを存分に満たした。

やっかいなフィールドボス達との度重なる激戦、直属の精鋭【八陣ノ鬼将】達の助けが無ければ高確率で死んでいただろうダンジョンボス 灼誕竜女帝“との死闘。それらを経てかなり溜まっていた諸々を発散できた事によって、一夜明けた今は心身共にスッキリ軽くなっている。

ただ、現在地はダンジョンである火山の最深部の為、気持ちのいい朝陽を拝めないのだけは残念でならない。もし拝めていれば、より清々しい朝を迎えられたに違いない。

それにここは少々蒸し暑く、加えて昨夜の行為によって全身が汗やら何やらで濡れているので、肌がベタついて爽快感が今ひとつ足りなかった。

だからか、この辺りに満ちているのが溶岩などではなく、適温の温泉だったら、と思う。そうで

あつたならば、まずかけ湯で汚れを落とし、それからゆっくりと浸かった事だろう。最初は半身浴で身体を慣らし、ジワジワと温めて疲れが湯に溶け出していくのを楽しむのだ。そしてゆっくりと肩まで浸かった後は、クイツ、と用意していた酒を飲む……

その時に飲むのは何がいいだろうか。

長い年月をかけて熟成した、まさに大森林の至宝と言うべき美味なるエルフ酒か。

あるいは特定のダンジョンモンスターのドロップ品である、種類と数が潤沢な迷宮酒か。

はたまた以前「詩篇」をクリアして手に入れた、【鬼酒・銘「尽きぬ夜桜の一滴」】や【鬼酒・銘「鬼酔殺・無尽」】を解禁するのもいいかもしれない。

などと色々想像していると、ゆっくりくつろげる《クーデルン大森林》の温泉が急に恋しくなった。

あの、浸かるだけで心身が生まれ変わるような素晴らしい温泉で、大好きな酒を好きだけ堪能する——それがどれほど素晴らしい事か、外に出ている今は殊更強く実感させられる。

思い出してしまえば、懐かしさが止まらなくなった。ある種のホームシックみたいなものだろう。最近は何かと働きすぎのような気もするので、そろそろ長めの休暇が欲しい。何も気にせず休暇を満喫できる場所といえば、やはり大森林の拠点となる。

日々成長を遂げている大森林近辺でも、まだまだやりたい事は多い。できるだけ早く帰れるよう

準備を整えたい。そしてその時は、子供達も連れて行こう。

そんな、急に湧き出した願望と未来の確定事項については一先ず置いといて。

俺が朝起きてまずした事は、【金剛夜叉鬼神・現神種】という新たな身体ツシミカクシヤクシヤハクド・ツシイロシノシノの操作の確認だった。

【存在進化】したばかりの昨日は完全に持て余していたが、一夜をカナ美ちゃんと共に過ごした結果、既に大体の使い方を把握できている。能力値が跳ね上がったとはいえ、誰でもない自分自身の肉体だ。実際に動かしていれば自然と慣れる。制御できない訳がない。

しかしまだ完璧ではない為、不安定で頼りない部分がある。それを無くす為に幾つか簡単な武術の型を繰り返し、微調整を重ねて身体操作の習熟に努めた。

やはり、四本となった腕の扱いには特に苦戦させられた。

動かす事に違和感がある訳ではない。呼吸をするように、当たり前に動かせる。しかし二本の腕だった時と比べて、筋肉のつき方、神経や血管が通る場所、関節部の可動範囲、骨格の形状、連動する部位など、諸々が大きく違っている。そのため、殴る、という単純な動作でも力の入れ具合がこれまでとは異なるし、上半身のバランスの取り方も改めねばならない。

そういった訳で最初は困ったが、前世で特殊環境下において有効な多腕型の特種パワードスーツを何度か使用した経験があったので、しばらく試しているうちに何とかなった。

まずは身体を自在に動かせるようになるのが目的なので、これまで体得していた技術や武術など

を最適化、あるいは改良する作業は、我が永遠の親友ツバユミノ吉きちくと組手しながら考えようと思う。

そうして確認を始めて三〇分も経たないうちに、身体を動かすと自然と発生してしまう烈風や雷撃なども完全に制御下に置けるようになった。余程の事が無い限りは、不意の暴発による被害は出ないはずだ。これなら、周囲に無駄な影響を及ぼす事なく戦えるだろう。被害が出たら出たでどうにかするつもりだが、手間は省けるなら省いた方がいいに決まっている。

確認作業を終えた頃、丁度カナ美ちゃんが起きた。

まだ寝ぼけ眼で、ボンヤリとしている姿は非常に可愛らしい。上半身を起こして前面を薄布で覆い隠しただけのほぼ全裸なその姿は、非日常な周囲の光景と相まって、妖艶ようえんで背徳的でありながら神秘的だった。

【存在進化】したカナ美ちゃんの現在の種族は【氷血真祖・超越種】だぞうだ。

【氷血真祖】とは【吸血鬼】という種族の始まりにして頂点——【始祖】に限りなく近いとされている【真祖】の一種で、種族特性からして氷と血の扱いに関しては並ぶ者がほほいないという。

分体を使って各国から集めた情報によれば、こんな記録がある。

遙か大昔、極寒の地に生息し、気紛れに近隣諸国を蹂躪していた【氷河龍王】を相手に単鬼で挑んだ【氷血真祖】は、地形が大きく変化する程の激戦を三日間にわたり繰り返した。そして最終

的に長大な【氷河龍王】の肉体を六分割して殺害し、放置すれば環境を汚染してしまう多量の【龍血】を魔水に変え、赤い魔水原を形成したそうだ。

そこは現在も存在するらしいが、ここからは結構離れた場所のようなので、実際に行くのはまたの機会にする。

このように、【真祖】は【帝王】類に勝るとも劣らない強さを誇る。その【超越種】であるカナ美ちゃんは、実質的に【帝王】類よりも強い事になるだろう。複数の【加護】もある為、恐らくそれで間違いない。

《アタラクア魔帝国》の【魔帝】や《エストグラン獣王国》の【獸王】は「英勇詩篇」とよく似た「帝王詩篇」の《詩篇覚醒者》達だが、現在のカナ美ちゃんと一対一で戦えば、高確率で負けてしまうだろう。生物としての格からして、カナ美ちゃんは以前と比べ物にならなくなった訳だ。

そんなカナ美ちゃんは、まだ完全に覚醒していないからか、【氷血真祖】として最初から備わっている【魅了】の魔力を周囲に無造作に振りまいている。

まるで涸れぬ源泉の如く溢れ出る【魅了】の魔力が充満し、効果範囲内にいる生物の本能を剥き出しにさせてしまうある種の異空間が形成された。

それは、彼女の肢体を思う存分楽しんだ俺ですら魅せる程に強力で、思わずゴクリ、と唾を呑み込む。

仕草の一つ一つが艶めかしく、分かっている目も目が離せない。俺以外の誰かがこの場にいれば、性別など関係なしに襲いかかって——その瞬間ひき肉にされそうだが——いたに違いない。全く、カナ美ちゃんは最高だぜツ。

などという、やや【魅了】されたような状態で出てきた惚気も置いて。今日も一日元気に活動する為に重要な、朝食の支度をする。

材料は、俺とカナ美ちゃんの目の前と、【異空間収納能力】の中にある。

つまり魔水によって保存されている灼熱竜女帝の肉体と、収納しておいた「紅蓮竜帝」の肉体、そして各種調味料である。

当然ながら、二頭の竜を全て喰べる訳ではなく、肉体のごく一部を使うだけだ。本当なら九鬼が揃った状態で手をつけたかったが、残念な事に他の七鬼はここには居ない。

【存在進化】を終えるまで俺が蛹のような状態になっている間は休暇と皆で決めたらしく、カナ美ちゃん以外は好き勝手に動いているからだ。

迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》に造っておいた、総合商会《戦に備えよ》の子会社——迷宮商会

《蛇の心臓》を拠点として買物を楽しんだり。

迷宮で怪我をした者の治療を、相場よりも安い値段で行ったり。

迷宮都市近隣ながら危険地帯にある未発見鉱脈を探し当てたので趣味を兼ねて掘ったり。

修業として、近場で目撃情報のあったボスモンスターを討伐したり。

とある分野の濃厚な趣味を裏で布教したり。

そういった事情により、今回喰べられるのは俺とカナ美ちゃんだけだ。皆揃って『お疲れ様ー』と祝杯をあげたかったのだが、仕方ない。残念ではあるが、それぞれが思い思いに休暇を楽しんでいて、近くにいないのが悪いのだ。

それに、この食材を美味しく喰べるには味をよく知る必要がある、その為に俺が先んじて喰べておくのはむしろ当然である。

という事にしておこう。まさにどこにも隙のない、万全の建前武装である。

こんな馬鹿な建前を削ると出てくる本音はもちろん、こんな美味そうな肉を目の前にして我慢する事など、俺にはできなかったのだ。

今の俺を突き動かしているのは、極めて個人的でありながら、生物としては必須である、純粹なまでの食欲だった。

【存在進化】したからか、あるいは【世界の宿敵・飽く無き暴食】なんてつけたいな能力を得てしまったからかは分からないが、以前よりもずっと早く腹が空くのである。

今も肉を見ているだけで腹が激しく鳴き喚き、口からは涎がこぼれそうになっている。

本能が、目の前の肉を喰らい疲弊した肉体を癒す上質なエネルギーを補給しろ、と訴えかけてくるようだ。

これに耐えるのは、流石の俺にもできそうになかった。理性の抑えはあれど、ここまで肥大化した本能には抗い難い。

それで、まあ、なんやかんやと——ツマミ喰いをするか否か——苦悩しながら調理していった。

灼熱竜女帝を覆う魔氷はカナ美ちゃんに溶かしてもらいつつ、竜肉を切り分ける。当然と言うべきだろうが、これが非常に切り難い。ドワーフ達が丹精込めて製造した、切れ味抜群のミスラル製の包丁ですら作業は困難を極め、少しでも無茶な使い方をすればほぼ確実に刃毀れしてしまう。

魔力による強化があったにしろ、あの巨軀を支えるだけあって、筋繊維一つ一つの強度や密度からして他の生物と比べものにならないくらい優れている。竜肉をモノともしない切れ味を誇る刃物でも無い限り、調理には高い技術と竜肉に対する深い知識が必要になるだろう。

倒す事もそうだが、調理する事も難しいとは、何とも難儀な奴である。その分期待は高まるのだが、それはさて置き。

拠点で俺の帰りを待っている姉妹さん達に渡して料理してもらおう際には、俺が予め切っておいた方が良さそうだな、と心のメモに記しつつ、四つの銀腕を部分的に変形させて切り分けていく。

そうして出来たのは、三〇〇キロは軽く超えていそうな竜肉塊が積み重なった肉の山。元が元だけに、かなりの数に切り分けても一つ一つがまだこれほど巨大である。

流石にそのままでは調理し難いので、一つを更に細かく切り分けて、五キロ程度の肉片にしてみた。この肉片の数が総数六〇。それでも十分大きいのが、これくらいのポリウムがあった方が喰べ応えはあるだろう。

そこまで調理を終えたところで、堪らず感嘆の溜息を漏らした。

何故なら、竜肉は魔氷によって新鮮なまま冷凍されていたとはいえ、死後数日が経過していてもまだ生きているかのような瑞々しい生命の輝きを発し、まるで宝石の如くであったからだ。いや、もはや宝石すら凌駕すると言ってもいい。

一度この輝きを見てしまえば、たとえ美食家でなかったとしても、全財産を出してでも喰べたいと思うに違いない。俺も自分の物でなかったら、たったひと口の為にも金を惜しまないだろう。

そんな至高の竜肉を、地面に置いた鉄板の上にポンポンと並べていく。マグマに囲まれたここでは、地熱によって鉄板はすぐさま高熱を宿す。その上で焼かれていく様を見ていると、流石は灼熱の竜女帝の竜肉だ、とここでも感心させられた。

鉄板の温度は非常に高く、普通の肉なら僅かな時間で炭化してしまうだろうに、この竜肉はジワジワとしか焼けない。厚く切った事も原因だろうが、そもその性質からして炎熱に強いのは間違いないだろう。

ここ以外で調理する際には、肉をもつと薄くするか、通常とは比べモノにならない程の高熱を発

生させる器具を用意する必要がある。

ところで何処かで聞いた話だが、肉や魚は強火でサツと焼くよりも、弱火でジックリと焼いた方が、肉汁がしっかり閉じ込められるらしい。

これが本当かどうかハッキリとは覚えていない。だが、戦闘中に軽く喰べた経験からして、失敗したとしても竜肉が不味くなる事はまず有り得ないと思う。今回はこの話を確かめるのに丁度いい機会ではないだろうか。

だから俺とカナ美ちゃんは、ただひたすらに焼けていく様を見続けた。

それにしても、巨大な竜肉が美味しそうな匂いを発するのをただ見ているに止めるには、強靱な精神力が必要らしい。

無意識に手が伸び、肉を掴む直前にハッと気がついて何とかそれを引っ込め、また手を伸ばし、なんて事を繰り返してしまっただ。一〇回を超えた辺りで数えるのを止めた。

あまりにも暴力的に本能に訴えるその匂いは中毒性の高い違法な魔法薬よりも厄介だ。また竜肉の赤みが徐々に喰べ頃に変わっていく様子など目の毒で、身体を押さえていないと耐え切れなかった。

目を閉ざしてもみたが、しかしそれは逆効果だった。溢れ出る肉汁が鉄板の上で心地よく弾ける音が、より印象的に聞こえるからだ。

その他にも様々な誘惑が、何とか耐えんとする俺達をあざ笑うかのように、食欲を暴走させるべく訴えかけてくる。

だがそれらに勝利して、俺とカナ美ちゃんはついに焼けた竜肉を手に入れた。

滴る肉汁は神々しい黄金の光を纏い、芳醇な竜肉の香りは驚嘆すべき事に竜の幻影を浮かべている。ただ焼いただけだというのに、生の状態よりも遥かに美味そうだ。

思わずゴク、と唾を呑んだ。

この状態でも、今までの食べ物の中で一番美味しいのは間違いない。だが、俺はジックリと焼いたにもかかわらずまだ生きているかのような気配を発する竜肉を、マジックアイテムの釜で炊いた迷宮産の白米に重ねて、大きな器の上に盛り付けた。

山盛りの白米と、積み重なる竜肉のコーポレーションである。

こうすると単品の時よりも更に美味そうで、もはや涎がこぼれるのを止められない。先ほどよりもゴクリと大きく唾を呑み込んで、愛用の箸で竜肉と白米を一緒に口に持っていく。ズツリとした重さがまた堪らない。思わず笑みを浮かべてしまう。

待ちきれずに開いていた口に竜肉と白米がゆつくりと入ったら、香りすら逃がさぬようにサッと閉じる。

すると、俺の歯はまず竜肉を捉えた。そして抵抗らしい抵抗を感じる事もなく、竜肉に突き刺

さる。

その瞬間、まるで喜劇のように大げさなりアクションと共に感動と感涙が溢れ出た。

非常に強靱であると共に柔軟でもある竜肉の高密度な筋繊維は、幾つもの層を形成している。柔らかい部分、硬い部分などその層ごとに食感は一変し、また味も変化していく。

様々な食感や味わいを楽しめるのだが、それでいて互いの味を打ち消す事は無い。むしろ引き立て合っていると見えるだろう。

しかもやはりジックリ焼いたからか、溢れ出る肉汁の量が半端ではない。たったひと口で、口内は満杯になったのだ。少しずつ飲んで減らさなければ、もう一度噛む事すら難しい。

この肉汁がまた美味しい。飲み続けると、竜肉と同じく味に変化していくのである。まさに千変万化。幾ら喰べても飽きがこない。

喰べれば喰べる程に様々な顔を覗かせる奥の深いこの竜肉は、なるほど至高の肉である。しかも米にも肉汁が染み込んで、より深い味わいとなっているのだからもう堪らん。

しばしの間は、何も考えずに一心不乱に喰べ続けた。俺もカナ美ちゃんも、目の前にある全てを喰べ尽くすまで止まらなかった。

喰べ終わった後には流石に腹がプクリと膨れたが、すぐに目に見えて凹んでいった。あつという間に消化されたらしい。自分の肉体ではあるが、なんだか不思議な光景だった。

それで今回二頭を喰べ比べたところ、竜帝よりも竜女帝の方が肉質が若干柔らかく、味に深みがあつて、個人的には美味いように感じられた。

しかしやや硬い竜帝の肉もそれはそれで捨てがたく、どちらも長所があり短所がある。これには個体の強さの違いもあるが、雄と雌という性差も要因として考えられるだろう。

【能力名【炎熱無効化】のラーニング完了】

【能力名【竜帝の爆炸咆哮】のラーニング完了】

【能力名【灼熱の竜血】のラーニング完了】

【能力名【無尽なる竜帝の命精】のラーニング完了】

【能力名【炎熱吸収】のラーニング完了】

【能力名【下位竜生成】のラーニング完了】

【能力名【中位竜生成】のラーニング完了】

【能力名【上位竜生成】のラーニング完了】

【能力名【迷宮警備員・主任】のラーニング完了】

そして九個のアビリティをラーニングできたのだが……

……待て、ちょっと待て。

一つ変なのが混じっているぞ。

なんだよ、【迷宮警備員・主任】つて。

これはあれか？ あれなのか？ 竜女帝は実のところ常日頃はゴロゴロしていたのか？ もしくはグータラしていたのか？ あるいは初めての挑戦者である俺が来るまでずっと喰っちゃ寝しながら待っていたのか？ だから、こんなモノを獲得したのか？

それは分からない。分かりたいとも思わないが、ともかく。

獲得したのだから考えても仕方ないとして、これにはどんな能力があるのだろうか。

試しに『宝石出ろ』と思いつながら床ドンしてみると、叩いた近くの地面が隆起し、掌サイズの赤い宝石が出現した。

パパッと鑑定して何の変哲もない宝石だと確信した後、パクリ、と喰べてみる。コリコリとした食感と、僅かな甘味。それなりの量の魔力を内包しており、中々に美味しい。

——しばし黙考。

今度は『宝箱出ろ』と思いつながら床ドンすると、によきりと宝箱が出現した。開けてみると、様々な品が入っている。魔法金属や、魔法薬の類だ。

お土産に丁度良さそうだったので、さっさとアイテムボックスに収納した。

その後もしばらく色々試してみると、これは俺が支配したダンジョン限定ながら様々な特権を素早く行使できる能力らしい、という事が分かった。

もちろん獲得したダンジョンは、【迷宮略奪・鬼哭異界】ダンジョンラフターを使って設定を弄れば内部のモノを全て操作できる。が、下手を打てば周囲が全てマグマで満ちてしまうなどの大小様々なミスが発生する可能性がある。一瞬の差が生死を分けるような緊急事態にあつては使い難い。

だが今回の能力ならば、瞬時に欲しい物を出現させたり、簡単な地形変化を行使したりする事が可能だ。一応限界はあるようだが、簡単な用事なら大抵は一動作でどうにでもなる。

何だこれ、と最初は思ったが、ダンジョン内ならばかなり使えるので、まあ良しとしておこう。そうこうしつつ、夕方近くまでダンジョンの機能を掌握したり、【飽く無き暴食】について調べたりした。

ダンジョンの調整はまだ時間がかかるが、【飽く無き暴食】の方は比較的早く解明できた。

どうも、こいつは俺の【吸喰能力】と非常によく似た性質をしているらしい。

細々とした能力も幾つかあるようだが、メインは喰べれば喰べる程、保持者——つまり俺だ——の能力を向上させる事にある。

つまり俺は喰べる程に、【吸喰能力】と【飽く無き暴食】という二つの能力によって以前より二倍速く強くなっていく、と捉えればいいだろう。

これはかなり助けになりそうだ。その分以前よりも食欲旺盛になっているが、それはさて置き。

こうすれば能力がかけ合わさってラーニング確率が高くなるのだろうかとも思ったのだが、しかし現実はその甘くないらしい。

というのは、俺が【存在進化】した為だ。【飽く無き暴食】で以前よりも吸収能力そのものは向上しているようだが、現在の種族【金剛夜叉鬼神・現神種】は強すぎて、ラーニング確率は以前より若干低くなったくらいだ。

もし【存在進化】しなければ以前よりも遥かにラーニングしやすくなったはずだが、もう後の祭りだ。今の種族を選んで失敗したとは思っていないし、ラーニング確率が極端に低下するのを防げたのだと考えれば、まあ仕方ない。

ともかく、謎が一つ解けたところで、ダンジョンを俺好みに改造する為に夜遅くまで頑張った。ちなみに、俺の名前はアポ朗からオバ朗とした。夜叉朗やヤクシャ朗よりは、鬼神のオバ朗がしっくりきたからだ。一方のカナ美ちゃんは、カナ美ちゃんのままである。

本日の合成結果。

【下位竜生成】 + 【中位竜生成】 + 【上位竜生成】 = 【真竜精製】

《二百五十七日目》

昨日から今日の夕方にかけて黙々と作業した結果、ダンジョンの改造は一応の完成を見た。

【迷宮略奪・鬼哭異界】を行使すると、目の前に詳細な情報が表示された半透明の画面が浮かび上がり、それを操作すれば現実のダンジョンに反映されるようになっていく。

最初は驚いたものだが、操作方法などはどこことなく前世で使っていた機械端末と似ていたので、慣れればたいした苦もなく弄る事ができた。

ダンジョンの変更点については、細々と挙げればキリがないので、大きな変化をピックアップしてみよう。

まず、この名称は【フレムス炎竜山】ではなく、【鬼哭神火山】きくしんかざんとなっている。別に変えなくても良かったのだが、俺が攻略して支配したダンジョン——これからも増やすつもり——かどうかを分かりやすくした結果である。

次に、トラップの数や仕組みなどに俺の趣味が強く反映され、入ってきた獲物を逃さないよう、結構悪辣なモノが増えた。ただ攻略者を片っ端から亡き者にしては新規の攻略者が途絶えてしまうから、奥に進めば進む程極悪になるものの、比較的浅い場所はこれまでよりも簡単に進めるよう緩くしている。宝箱なども若干取りやすくなったので、以前よりも多くの攻略者達がやって来てくれ



るだろう。

それから出現するダンジョンモンスターに、マジックアイテムを狂わせる厄介な能力を秘めた「ブラックゲレムリン」や、灼熱の溶岩で構成された悪魔「デビルラヴァ」などを追加している。これらは単純な強さこそそれ程でもないが、攻略においては厄介となる能力持ちが多い。

そして最も大きな変化といえば、出現するフィールドボス達についてである。既存のモノだけでなく、新規のフィールドボスを数体加えてみたのだが、俺の加護の影響か新旧全てのフィールドボスの身体は黒く染まり、能力も飛躍的に上昇していたりする。ただでさえ強力な存在だったアイツ等が、更に強力になって攻略者達の前に立ち塞がる訳だ。

支配者としては非常に頼りになるが、攻略者の立場からすれば最悪だろう。ちなみに、フィールドボスの他にも普通のダンジョンモンスターより強力な個体が一定数存在するので、【鬼哭神火山】の全体的な難易度は【フレムス炎竜山】時代よりも数段上がっている。その分、倒した時に得られる戦果が前以上なので、実力者達はよりやる気になるのではないだろうか。

大きな変更点はこれくらいだ。他にも地形やら色々あるが、面倒なので省略する。

それで、ダンジョンの変更点とは関係ないが、設定している最中に気がついた事がある。なんと嬉しい事に、ここで死んだ攻略者から得られる経験値が、全てではないが俺にも流れ込んでくる仕様になっていろいろらしい。

浅い場所の難易度を下げたのも、挑戦しようとする者の数が増えれば増える程、効率よく俺自身のレベルが上がると思ったからに他ならない。現在の種族では、一レベル上げるのにも必要経験値が馬鹿みたいに多いので、正直このシステムは非常に助かる。

——哀れな獲物達よ、俺の為に挑戦するがいい。
などと、背後から俺に抱きついてるカナ美ちゃんと共に悪役の笑みを浮かべた。

ここに留まる理由は無くなったので、これからカナ美ちゃんと迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》に向かう。だがその前に、ちょっとした夜空のデートを楽しむ事にした。

現在は俺達二鬼とも、種族として元々保有する能力によって自在に空を飛べるようになっていたのだが、今回は自分達の力を使うつもりはない。新しく手に入れた《使い魔》の試乗も兼ねているからだ。

新しい《使い魔》の名はタツ四郎、種族は【古代炎葬竜】である。

体長は約八〇メートルと、一部例外を除けば【知恵ある蛇／竜】としてもかなりの大型に属し、

【帝王】類にも迫る巨躯を誇っている。
巨軀を支える強靱な四肢には、鋼鉄の塊すら空気のように切り裂く高熱を纏う赤い鈎爪が備わり、禍々しい赤黒い竜鱗や竜殻で覆われた胴体は生半可な攻撃では傷一つ付きそうにない。

側頭部には立ち塞がるモノを尽く貫く魔槍の如き四本の赤い竜角が、橙色に燃える炎の毛を備えた艶やかな背中には二対四枚の巨大な竜翼が生えている。

まるで寶石のような紅蓮の竜眼からは高い知性が感じられ、鋭牙が無数に並ぶ口内には煌々とした竜炎が見受けられた。

全身から発散される存在感はあまりに濃厚で、【フレムス炎竜山】時代のフィールドボスだった竜帝と同等か、もしかするとそれ以上ありそうだ。

そんなタツ四郎が何故俺の《使い魔》となっているのか。

それは、遙か古代に死んで化石として眠っていたタツ四郎を、ダンジョン改造中の俺がたまたま見つけ、これ幸いと復活させたからに他ならない。

こいつを復活させるのに必要だったのは、今回ではなく前回の【存在進化】時に得た能力——つまり【使徒鬼・絶滅種】の保有スキル【化石復元】である。

【化石復元】は太古の化石を一定量用意しなければ発動できず、これまでは化石が無かったため使用だったのだが、今回ようやくその真価を発揮してくれた訳だ。

この古代竜を復活させてからしばらく観察して分かったのだが、タツ四郎の生来の気性は荒く、執念深いようだ。一度敵とみなせば、こいつが完全に炭化するまで執拗に追い続けるのだから。

太古の世は現在よりも強靱な種族が多く、そんな時代を生き抜いたタツ四郎という存在は、追い

かけられる側からすれば悪夢でしかない。

だが復活させた俺には完全服従でかなり懐いているし、何気ない仕草にどこことなく愛嬌があつて、中々可愛いものである。

癒されつつタツ四郎に【騎乗】した俺と、俺に背後から抱きつくカナ美ちゃんは、夜の闇に紛れて【鬼哭神火山】から飛び立った。

アツという間に高度数千メートルまで到達して雲を突き抜け、夜の雲海を見下ろしながら二鬼でしばしの飛行を楽しんだ。目的地まではあつと言う間だが、せっかくのデート、こうしたひと時も悪くないだろう。

それにしても、こうして何かに乗って空を飛ぶのもいいもんだ。月明かりに照らされた雲海の美しさを見ると、日々と身体に溜まっていく何かしらが軽減されるかのようである。

飛行中、様々な考えが脳裏を過った。

俺が意識を無くしていた間に、面白そうな事が立て続けに発生していた。情報収集の為に各国に忍ばせている分体経由で知ったそうした流れは、様々な思惑で掻き混ぜられながら着実に進行中だ。規模がこれまでに無い程大きい事象なので、確実に乗り越える為には早めに行動を開始しておいた方が良さそうだ。

もっとも、今までの地道な活動のおかげで、そこまで急を要する状況でもない。とにかくできる

だけコチラの利益になるよう上手く転がすべく、これからも肅々と手を広げていくのみである。ああ、本当に楽しみだ。

未来で手に入るであろう獲物を思っていると、カナ美ちゃんに小突かれた。少々考えすぎていたようだ。反省しつつ、デートを楽しむ。

やがてそんな魅力的な時間も終わりを迎える。雲海の切れ目から迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》が見えたので、高度数千メートルを飛ぶタツ四郎の背から飛び降りて入る事にした。

タツ四郎の姿が目撃されれば、混乱は必至。無用の混乱を招くのは宜しくない。だから俺とカナ美ちゃんは、夜空のスカイダイビングをしばし堪能したのだった。

空からの不法侵入と言えるかもしれないが、そんな話は今更である。少なくとも、俺は気にしない。

《二百五十八日目》

迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》にある、迷宮商会《蛇の心臓》の店舗。

ここはかつて名を馳せた攻略者が膨大なアイテムと潤沢な資金を注ぎ込んで建築し、その攻略者が亡くなった後はついこの前まで数十人も不法滞在者によって占拠されていた屋敷である。

そこは現在、非常に繁盛していた。

扱っている商品の大半は一級品。しかも値段は質と比べて手頃である。使用頻度は少ないが特定の場面では大いに活躍する細々としたモノも揃っている。

一定の金額毎に押されるスタンプカードは、空欄が全て埋まると一定金額の値引き、または腕利きのドワーフ達による武器の手入れ一回無料サービスなどの特典あり。

接客をしている店員は見目麗しいエルフや【鬼人】の女性が多い為、男性比率高めで攻略者達が多く訪れていた。店員に惑わされて鼻の下を伸ばす軟弱者も数多いが、一方でその他大勢に埋もれない猛者達が真剣に商品の下見をしていたりもする。

開店してからまだひと月も経過していないばかりか、大々的な宣伝もしていないにもかかわらず、何故こんなにも賑わっているのか。

確かに開店セールや立地条件の良さ、新しく出来たという目新しさも客を呼んでいる一因だろう。しかし最たる原因は別にある。

ここに攻略者達が集うのは、つい数日前、迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》に異形の集団がやって来たからだった。

つまり、ミノ吉くん達の凱旋だ。

先日【存在進化】した皆の種族は強力無比なものばかりであり、余所では支配者として国を治めているような種族が大半を占めている。そんな目立つ集団が迷宮商会《蛇の心臓》に迷う事なく直

行し、そこでここ数日生活しているのだ。

力こそ正義、という傾向が強い迷宮都市において、規格外の力を持つ存在が多数滞在する店を見に来る者が多いのは、当然といえば当然だ。そこに行けば彼らと縁を結べる可能性があるだけでなく、強者が贖身するような店ならではの武器や雑貨を手に入れ、あやかりたい、と思う事だろう。せつかく俺が関わっている事をカムフラージュする為に迷宮商会《蛇の心臓》を用意したのに、この時点で本来の目的とズれているような気もするが、まあ起きてしまったことは仕方ない。実は迷宮商会《蛇の心臓》の店主——俺の変装だが——が俺達と知り合いで、その縁でミノ吉くん達が泊まっている、という噂話をさり気なく流す事にした。《戦に備えよ》の団員達には、人に聞かれればそう答えるように伝えておく。それでもダメな時は、聞き直って別の案を考えればいいだけだ。

ともかく、予想以上の繁盛ぶりを喜びつつ、【変身】と【形態変化】によって誠実そうな金髪碧眼の青年実業家風に外見を変え、柔和な笑みを浮かべ店主として常連客を獲得すべく接客した。他の都市なら、この選択で正解だったのだろう。誰だって、強面でヒトを頭から喰いそうなのより、優しく誠実そうな人物の方を信頼するに決まっている。

だがここは迷宮都市。他の都市と同一視するのは不適切だったのだ。

どうやらナヨナヨした外見だと舐められる傾向にあるらしく、変装した状態ではフザけた輩がう

るさく囁くようになったのだ。威圧して大幅な値下げを強要してくる者や、金を支払わずに商品を持っていくとする者が続出してしまった。

まあ、そんな奴らは一瞬で振じ伏せ、とっ捕まえて、専用の暗室で色々この店の常識を叩き込んだりしてやって、ともかく頑張った。

夜には皆で竜肉を使った宴会を、とも思ったが、ミノ吉くんとアス江ちゃんは都市外に居るので、明日にお預けになった。残念であるが、仕方ない。

《二百五十九日目》

朝から、屋敷の中で一番豪華な内装の自室で溜まっていた書類を処理したり、集めたドロップアイテムを整理確認して販売する価格を決めたりなど、仕事に勤しんだ。

昼頃にそれが終わると、今回の攻略で集めた宝箱——

フィールドボス ヴォルカニック・ジェネラルエイプ からは宝箱【火猿将の柩】

フィールドボス マグマナイト・サーペンディア からは宝箱【螺王の墓守】

フィールドボス グラルヴォリック・ゴルドエレファリオン からは宝箱【巨象兵の棺】

フィールドボス ヴォルケイン・ブルオークキング からは宝箱【猪王の霊廟】

フィールドボス ブルーフレ임・デビルトオレント からは宝箱【悪魔樹の卒塔婆】

フィールドボス “トードラスデーモンロード・アーダーディア” からは宝箱【灼牛魔の遺物】
フィールドボス “紅蓮竜帝・フレルブルイグナトス” からは宝箱【紅蓮の帝墓】
迷宮の主、灼誕竜女帝・ムスタリアイグナトス” からは宝箱【女帝の宝骸】

——を開け、中身を確認していく。

前回の【清水の滝壺】では五〇種類の品々を得る事ができたが、今回は何と二〇〇種類ものアイテムを得る事ができた。

入っていた数は【火猿将の枢】と【螺王の墓守】が五種類と一番少なく、【巨象兵の棺】と【猪王の霊廟】は一〇種類、【悪魔樹の卒塔婆】と【灼牛魔の遺物】は一五種類、【紅蓮の帝墓】と【女帝の宝骸】は二〇種類と最も多かった。とはいえどれもこれも有用な物ばかりであり、戦力増強には欠かせない品々だ。

特に武器は全て強力なマジックアイテムだったがだけに、誰にどれを与えようか、かなり悩む事になった。実力に見合わない強すぎるモノを与えては成長を阻害してしまう恐れがあるのだが、誰にも与えずに保管するのでは非常に勿体無い。

そうだな、最近ではチラホラ【鬼乱十八戦将】に目覚める者達が出てきたので、そちらに優先的に与えるのがいいだろう。

悩んだ結果、それでも大半はアイテムボックスの中に眠らせておく事にしたが、幾つかは団員に

与える予定である。

そうしてなんやかんやと慌しく過ぎ、夕方になった。もうすぐミノ吉くとアス江ちゃんが帰ってくるので、宴会の用意を進める。

もう雪が降る事も無くなり、徐々に暖かくなり始めているので、汚しても後片付けが楽な屋外でバーベキューをする事にした。

会場となる庭には至るところに「永統光」の魔法が付与されたランタンが設置され、夜に対する備えは万全。団員達は明るいうちに準備を終えるべく、食器やら机やらを忙しなく用意していく。

そんな様子を見ながら、銀腕をミートナイフに変形させた俺は、コンロ型マジックアイテムの前で仁王立ちした。

目の前の台には、調理される事を待つ竜肉が鎮座している。相変わらず美しい輝きを放つそれを俺は捌いていく。

今回は切って焼くだけという簡単な料理法なので、ブラ里さんが最適だとは思うのだが、それを察知したのか、彼女はスペ星さんと共に派生ダンジョンの一つに潜ってしまつて現在不在である。一応罪悪感があるのか、ブラ里さんは『手土産にダンジョンボスを殺してくるから、見逃してよ』と言っていた。達成できなかった場合は何かしらさせるつもりだが、まあ間違いなく倒してくるだろ

うから、逃げた事に関しては気にしないようにした。

相変わらず美味そうな竜肉を前にすると、気分が良くなってくる。今日は秘蔵の酒を皆に振舞ってやるか、と思っていると、数名の見知らぬ女を引き連れて廊下を足早に進むイロ腐ちゃんの姿を見つけた。皆揃って大量の紙やインク瓶や筆を抱えている。

【鬼腐人・亜種】^{フイクロッド} だったイロ腐ちゃんは、先日のダンジョン攻略時に【腐死鬼姫・新種】^{アイデイハイド} という種族に【存在進化】している。

外見はそこまで大きく変化していないが、より儂げ^{はかま}でか弱そうな雰囲気が増された事により、大切に育てられた何処かの国のお姫様のように見える。

だがふとした時に見せる何気ない仕草は蠱惑^{こわくま}的であり、瞳には隠しようのない退廃的で狂氣的な薄暗い光を宿し、欲望を掻き立てる芳^{かぐわ}しい体臭の奥底には表現し難い腐臭を隠している。

そんなイロ腐ちゃん改めアイ腐^ふちゃんが、見知らぬ女達を引き連れて、とある一室に入っていた。そこはアイ腐ちゃんの個室なので、個人的に友人を招く事はなんら不思議な話ではない。

そして何をするつもりなのかは、女達が浮かべていた奇妙な笑みから予想できた。

きつと、『布教活動』に勤しむのだ。

以前から【腐食の神の加護】を持っているからか、アイ腐ちゃんのとある偏^{かま}つた分野における布教活動の手腕は卓越しているらしく、日々順調に同好の士を増やしている。今の女達に見覚えはな

いので、きつと迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》で新たに獲得した仲間と違いない。

濃厚そうで清楚な【聖職者】やプライドの高そうな【貴族令嬢】、短髪で鍛えられた肉体を持つ現役の【冒険者】や変わった風貌の【画家】などが居るようだが、必要がない限り、個人の趣味に干渉するつもりは無い。

趣味は個人の自由である。他人がどうこう言うものではないだろう。周りに迷惑をかけないのなら、勝手にすればいいと俺は思う。仮に俺達が彼女達の趣味のモデルにされたとしても、あえて俺達がそれを知らなければいいだけだ。

むしろ精神の安定の為に、俺は深入りしない。絶対にだ。

という事で、見て見ぬふりをすべく別の方向に目を向けると、そこには以前は無かった王者の風格というか、支配者の貫禄というべきモノを備えたセイ治^じくんとクギ芽^めちゃんが居た。どうやら今まで、セイ治くんが格安の報酬で行っている治療をクギ芽ちゃんが手伝っていたらしい。

仲良く並び立ち、今日の晩飯を用意している俺達の所にゆっくりと向かってくる。美男美女で、非常に絵になる二鬼だ。

現在のセイ治くんは【聖輝鬼王・亜種】^{セイリネスキング} に、クギ芽ちゃんは【九祇鬼姫・亜種】^{くぎおにめ} となっている。

予想外といえは予想外だが、セイ治くんは【鬼王】^{キング} の一種になり、ある種のカリスマを帯びている。相変わらず戦闘能力自体はかなり低い——あくまでも【鬼王】の中ではという事であり、平均的

な【鬼人】程度ならば完勝できる——ようだが、治療能力において並ぶ者を探すと大変だ。まさか、両腕欠損に加えて臍へそから下がすっかり消失し、数秒後には確実に息絶えるはずだったブラックグレムリンを、一瞬で完全回復させるとは。生きてさえいれば、身体を半分以上欠損した状態からですら治せるセイ治くんは、これから大いに活躍してくれるだろうと期待している。

クギ芽ちゃん以前よりも綺麗になり、立ち振舞いがどこか洗練されていた。そしてその九つある眼を介した攻撃の威力や命中精度が向上したので、それなりに戦えるようにもなっている。

だが最も特徴的なのはその感知能力だ。通常時でも俺がアビリティを駆使するより優秀だが、本気を出せば、広大な王都の数倍から十数倍の範囲をあまり事無く感知できる。

軍隊同士が各地でぶつかり合う戦争になっても、クギ芽ちゃんはそれらの戦場の全てを見透すだろう。敵が策を駆使しようとしても、全て事前に分かっってしまう。ならば敵の弱点を容易に穿てるし、敵の反撃をいち早く叩き潰せるだろう。後方支援としてはこれ以上無い程頼りになりそうだ。

そんな二鬼は、甲斐か甲斐いしく世話を焼く部下達が用意した場所で優雅に宴の始まりを待っている。どちらも団内では頂点に近い地位にいるのだから当然の待遇なのだが、ではトップであるはずの俺が何故こうして直々に肉を捌いているのか、と思わなくもない。

まあ、カナ美ちゃんが隣で手伝ってくれているので、別にいいけどな。

しばらくして、ブラ里さんとスぺ星さん達が帰還した。キツチリとダンジョンボスのドロップアイテムという手土産付きで。だから、逃げ出した事に一言二言愚痴ぐちを浴びせてやった後は、適当にくつろいでいるように言っておく。

それから更に時間が過ぎた頃、ミノ吉くとアス江ちゃん達も帰ってきたので、いよいよバーベキューを開始した。

皆一様に、まず金網の上に並ぶ竜肉を見て硬直し、立ち直つてからは嬉々ききとして喰べ始め、そしてそのあまりの美味さに仰天していた。滂沱ぼうたの涙を流し、跪ひざまずいて身を震わせ出す者も多い。

皆一心不乱に喰べ続け、切っておいた全ての竜肉が無くなると、余韻よゐんを味わいながらひと息つく。その後は竜肉の感想や仕事の進み具合などを話題にして盛り上がり、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎとなった。

俺が三〇個程用意した大樽には、アルコール度数が非常に高い、高級品に分類される迷宮酒が入っている。それがまるで水のように消費されていた。飲み比べをしてすっかり酔っ払い、赤ら顔でふらついている者もかなり多い。夜でも活気がある迷宮都市でも、今夜はここが一番賑やかなのは間違いないだろう。

やはり皆で飲む酒はいいもんだ。一人で飲む酒も美味いが、誰かと飲む酒も美味しい。今、皆が楽しそうにしている様子を見ながら、隣に座っているミノ吉くんやカナ美ちゃん達と【鬼酒・銘「iskiぬ夜桜の一滴」を飲み交わしていると、つくづくそう思う。】

竜肉は皆に振舞った代わりに、特別な酒である【鬼酒・銘「尽きぬ夜桜の一滴」】を飲むのは我々九鬼だけだ。他の団員が羨ましそうに見ているようだが、こればかりは振舞うつもりは全くない。

それは、幹部以外に飲ませられるシロモノではない、という理由もあるが、なにせ竜肉との組み合わせが絶品だ。それぞれだけでも極上だというのに、組み合わせると更に何倍にも美味くなる。消費した分は時間経過で元に戻る酒とはいえ、誰彼構わず制限なく飲ませては肝心の俺達が楽しんで。これも階級格差だと思つて諦めてもらうほかない。

そうこうして、楽しい宴は夜遅くまで続き、後片付けをしてベッドに寝転んだ。

睡魔は即座にやって来る。

そして意識が沈む直前、脳裏に響いたアナウンス。

「赤髪シヨート（ルベリア・ウォールライン）が【鬼乱十八戦将】に覚醒しました」

「称号【赤餓狼】が贈られます」

やはり赤髪シヨートも数に入っていたかと思いつつ、俺は意識を手放した。

《二百六十日目》

早朝、さっそく赤髪シヨートに連絡を取った。

どんな分野の能力が強化されたのかなどを鈍鉄騎士達の時と同じように聞き出し、しばらくの間は以前の差異について情報を収集してもらうよう伝える。そして聞きたい事を聞き出した後は、何気ない話題で盛り上がった。

話を終えると栄養バランスの良い朝食をとり、団員達にざっと今日の指示を出した後、俺とカナ美ちゃん、ミノ吉くんとアス江ちゃんの四鬼は迷宮都市を出て、しばらく平原を進んだ。

あれほど積もっていた雪も今では少なく、道程に問題はない。そして周囲に誰の気配も無くなると、事前に呼び寄せておいたタツ四郎に乗って【鬼哭神火山】にやって来た。

入口付近で降りしてもらつて、敷地内ならば即座に何処にでも跳ぶ事のできるワープゲートを使用する。

ワープゲートによる移動は一瞬だ。気がつけば、俺達は火山内最深部に居た。俺とカナ美ちゃんが竜肉を堪能したあの場所だ。

ここのダンジョンボスである、今や全身が黒く染まった灼熱竜女帝は、壁の穴の棲家に収まって寝転んでいたのだが、やって来た主——つまり俺だ——に反応して眠りから覚めたようだ。

灼誕竜女帝が、今回の来訪はどんな用事なのかと聞いてきたので、ここで今からミノ吉くんと訓練をすると伝え、しばらく上に行っているよと命令した。

灼誕竜女帝は即座にそれに従った。広げられた竜翼が膨大な魔力を操作して、巨躯が軽やかに舞い上がる程の浮力を生じさせた、かと思えば数度羽ばたくだけでアツという間に上空に飛んでいく。あの巨躯が飛び上がる光景は何と見事で力強いものだろうかと思いつつ、カナ美ちゃんとアス江ちゃんには、危険だから灼誕竜女帝の棲家に引き籠こもっていてくれるように頼んだ。

【帝王】類と同等以上の力を持つ【地獄閻鬼・亜種】に【存在進化】したアス江ちゃん。彼女の雷びくけつしゅう獄結晶とカナ美ちゃんの魔力による多層防壁なら、逸れた攻撃が直撃しても耐えられるだろう。アス江ちゃんは以前よりひと回り程も身体が大きくなり、更にガツチリと逞たくましくなった。褐色の皮膚は滑らかな見た目に反して半端な攻撃では傷一つつかないし、その下にある筋肉は柔軟でありながら強靱だ。仮に皮膚を突破するような攻撃でも、この筋肉で止められるに違いない。カナ美ちゃんだって、華奢かしゃな見た目の割にかなり頑丈だ。

そんな二鬼ならば、多層防壁を破壊する程の攻撃を受けたとしても、即死する事はない。それだけの防御力はある。

多分、おそらく、きつと。

……やっぱり心配なので、手持ちの中で最も強力強固な防衛特化型マジックアイテムを渡しておく。設置型なので持ち運ぶには不向きだが、一度設置すればそうそう壊れる事はない。いい機会なので、ついでに二人の武具一式を更新した。それらは全体的な構成こそ変わっていないが、材質や細かいデザインに差異がある。しかもどれもこれも【神代ダンジョン】で獲得したマジックアイテムばかりであり、その性能は以前よりも向上している。そもそもが下手な攻撃では傷一つつけられない防御力だし、装備者の能力を大幅に引き上げる能力まで備えた優れ物だ。

二鬼にはできる限りの事をしたので、改めてミノ吉くんと対峙した。
現在のミノ吉くんは【雷牛帝王・超越種】という種族に【存在進化】している。

【雷牛帝王】とは集団の長おそとしての能力に優れた【帝】と、個体としての能力に優れた【王】の特性の両方を持つという、今回【存在進化】した八鬼の中で最も強力な種族だ。しかも【超越種】である為、ミノ吉くんはかなり俺に近い存在に成ったと言えるだろう。

その肉体は以前と比べて、ふた回り以上は大きくなっている。金属繊維の束を組み上げたように筋骨隆々な肉体を覆うのは、黄金と純白、そしてそこに紋様を描く紅蓮くれないで構成された剛毛だ。これは聖剣魔剣の類でも容易に切り裂く事のできない硬度でありながら、ずっと触れていたいと思ってしまう程柔らかい。一度触れてしまえば離れられなくなる不思議な魅力があった。

だがずっと触れている事は不可能だ。なにせ時折、黄金雷と白炎が生じるからである。とはいえミノ吉くんが意図しない限り、この黄金雷と白炎が他者を害する事はない。

だが、今俺は、ミノ吉くと戦う為に対峙している。ならば当然、黄金雷と白炎は俺に牙を剥くだろう。白炎は【炎熱無効化】や【炎熱吸収】があるので効かないとは思うが、黄金雷の方は【雷電攻撃無効化】だけだと防げない可能性が微妙にある。呼吸によつて吐き出された呼気が攻撃だとは言い難いように、自然発生してしまう黄金雷もまた攻撃と判断されないかもしれないからだ。

まあ、ミノ吉くんの戦意に反応してか、紅蓮の剛毛によつて全身に描かれている紋様が紅く発光し、黄金雷と白炎はより一層激しく放出されて周囲を出鱈目に蹂躪している。流石にあれが攻撃じゃないとは、少なくとも俺は思わない。半端な者では、近づく前に死んでしまうだろう。

雷炎を纏い灼熱を宿した巨大なる牡牛。

今このミノ吉くんは、まさにそう表現するのがピッタリだ。全身に漲る威圧は力強く、相手にとつて不足はない。今回は様々な事情を考慮して無手で行うが、それでもきつと十分過ぎる程に楽しめる。

構えた俺とミノ吉くんはどちらからともなく笑い、合図もないのに、同時に動いた。



最後まで無手で行ったこの組手は、周囲の地形を激変させながら、夜遅くまで一度も止まる事な

く続いた。互いの体力はもはや無尽蔵といつていい段階に達している為、一切休憩する事なく全力で戦い続けられるのだ。

そして勝敗は、もちろん俺に軍配が上がった。

だが余裕である、という訳ではない。どうやら【物理ダメージ貫通】かそれに似た類の能力を新しく得たらしいミノ吉くんの物理攻撃は、完全に防御しても確実に一定以上のダメージを俺に与えた。

しかも黄金雷と白炎を浴びると、これまた【物理ダメージ貫通】に似た類の能力による恩恵か、あるいは先の迷宮攻略達成の特典として皆が得た【竜炎の理】か、または別の能力——『真名』によつて得た固有能力【神殺しの雷炎】あたりが非常に怪しい——によるものか、もしくはその全てが要因かは分からないが、こちらも一定以上のダメージが蓄積されていった。

自分がやる側の時は分からないのだが、防御しても身体の芯にまで響く攻撃は、実にイヤラシイものである。今も馬鹿げた威力を秘めた殴打を受けて身体の節々が鈍く痛み、黄金雷と白炎を受けた部分はヒリヒリと日焼けたようなダメージがある。

このようにそれなりの痛手を負う程、激しい組手だったが、非常に有益な一日だったのは間違いない。この身体での戦闘技法の最適化を達成し、ミノ吉くんの成長具合を知る事もできたのは大きい。

カナ美ちゃんとアス江ちゃんが用意してくれていた夜食を喰べた後は、寝具も敷かずにごろんと寝転んだ。ゴツゴツとした足場の感触を背中に感じる。だが俺の皮膚は丈夫だ。多少不快感はあるが、寝る事に支障はない。

仰向けになれば、自然と夜空が視界に入る。強化された視力は火口に浮いている《決闘場》の底部だけでなく、遙か遠くに存在する無数の星の輝きも鮮明に捉えた。

たまにはこういった景色をジックリ見るのもいいもんだと思いつつ、そのまま眠りについた。

——のだが。

【秋田犬（アキカゼノツジ）が【鬼乱十八戦将】に覚醒しました】

【称号【忠犬侍】が贈られます】

【女騎士（テレーゼ・E・エッケルマン）が【鬼乱十八戦将】に覚醒しました】

【称号【憐輝士】が贈られます】

再び聞こえたアナウンス。

正直女騎士がそうなるとは意外だったのだが、そういえば最近構っていないなと思ったので、絶対にいいお土産を渡そうと決めた。

《二百六十一日目》

目覚めてすぐ、昨夜覚醒した両者に連絡を取る。これまでと同じ事を訊ね、その後はしばし会話を楽しんだ。

そして竜肉で作られた朝食を平らげた後は、昨日の続きとばかりに張り切って訓練を行った。

昨日は俺とミノ吉くんですら一対一を繰り返したが、今回はカナ美ちゃんとアス江ちゃんも参加している。つまり構図としては、俺対三鬼、という具合だ。そして無手ではなく、それぞれの得物や制限していた能力を全て使用可という、より実戦的な訓練である。

ミノ吉くんは【存在進化】に伴って大きく変化した愛用の武器を手に、まるで霊峰の如く前衛に君臨している。彼の代名詞ともいうべき巨大な戦斧は天斧【炎霊の断罪斧】となり、巨軀すら隠してしまう程巨大だった盾は天盾【雷牛帝王の絶炎城門】となった。いずれも性能は以前と比べて段違いに向上し、下手な【神器】を上回っているのではないだろうかと思う程に威圧感が凄まじい。中衛として構えるアス江ちゃんは、頑丈さと破壊力を兼ね備えた【大地母神の破城槌】という家のように巨大な鎚を片手で軽々と担ぎ、巨大な手を生成する能力を秘めた溶岩製ガントレット型マジックアイテム【猪鬼王の溶岩手甲】を装備している。

この三鬼の中では実力が劣っているが、大地などを操作する能力を活かせば、中衛としての役割

は十分過ぎる程果たせるだろう。存在を軽く見ると、新しく生成できるようになった雷獄結晶などによって足元を掬われかねない。

そして後衛であるカナ美ちゃんは、数多の生き血を吸ったからか赤く染まる美しくも禍々しいクレイモア型の魔剣【月光の雫】を筆頭に、僅かな魔力で周囲に膨大な水を生成し意のままに操ることができる【噴水の腰布】、様々な魔矢を必中させる事ができる【必中の名弓】、周囲の水を取り込んで圧縮して撃ち出す事ができる魔銃【水圧縮銃・水卵】など数多くのマジックアイテムを装備している。【魔眼封じの眼鏡】も外して本気モードだ。これら様々な能力を秘めたマジックアイテムや強力無比な魔術も使いこなすので、多様性という点では三鬼の中で抜きん出ているだろう。

そしてそうした付属品を抜きにしても、純粹にカナ美ちゃんは強い。後衛として広範囲高威力の攻撃を仕掛けてくるだけでなく、まさかこんな事はしてこないだろう、という意識の隙間を突く手を平気でやってのけるので要注意だ。

それぞれの役割があらかじめ明確なだけでなく、臨機応変に対応もできる陣形は見事だった。付ける隙が全く見当たらない。

対する俺は、いつもの朱槍と呪槍、更に【猪鬼王の肉切り包丁】と【水震之魂剣】を四本の腕に装備した。

【猪鬼王の肉切り包丁】は【巨人族の長持ち包丁】の上位互換のような代物で、切れ味はいいし耐久力も抜群だ。これならばミノ吉くんの強靱な肉体すらも切断可能だろう。

【水震之魂剣】は他人の【神器】なので能力を十全に發揮する事はできないが、【神器】の耐久力は役に立つと見込んで使ってみた訳だ。

そんな訓練の結果だが、正直死ぬかと思った。

三鬼とも、最初から最後まで一切の手抜きなく全力だ。

俺相手なら何してもいいよね、とでも暗に示すような勢いで、三鬼による合体攻撃【滅撃・八鬼殲陣】やら陣形効果【無貌・八鬼戦陣】やらを全て使ってきたのである。【使徒鬼】時代だったら手足の五、六本はもぎ取られていただろう、凄まじい密度の攻撃でした。まあ、それでも勝つ事ができた。思った以上に、この肉体の性能は良いようだ。

そんな感じの訓練を一日続けて、夜は昨日と同じように飯を喰う。

ちなみに、なぜここで二日連続で訓練を行ったかという点、理由は単純明快だ。

現在の俺達では、訓練ですら周囲に影響を及ぼし過ぎるからだ。全力で手加減しながらやればそうはならないだろうが、それは窮屈だし、変な癖がつきそうなのでやりたくない。ともかくギリギリの攻防をするには、普通の場所ではダメなのだ。

軽い攻防の余波だけで地面に亀裂が走り、烈風が吹き荒れる。濃密な戦意と魔力の放出は、周り

にいる者に何かしらの影響を与えるだろう。すると危険を察知したありとあらゆる生物が、付近一帯から逃げ出すはずだ。その中には当然【大勢に害なすモノ】も含まれる。

そのモンスター達の進行方向に防衛手段に乏しい村や町が運悪く存在すれば、圧倒的物量の前に呆気なく蹂躪されて消滅するのは確実。

そうはならないかもしれない。が、しかし十分過ぎる程に考えられる可能性ではないだろうか。

俺は別に破壊の限りを尽くしたい訳ではないので、そんな悲劇は避けたい。もしかしたら将来俺達にとって利益になる存在がそこにいないとも限らないし、敵でもない命を無駄に散らせたいとも思わない。

だから俺が支配し、どれほど破壊しても自動修復する機能を持つ【鬼哭神火山】が、訓練には最適なのである。

とはいえ、いつまでもここに居る訳にはいかない。明日の出発に備えてさっさと寝た。

《二百六十二日目》

二日も訓練に費やした事だし、そろそろ《シュテルンベルト王国》の王都《オウスヴェル》に戻って子供達を回収して、拠点のある《クーデルン大森林》に向かおうか。

と思っていたのだが、今日も一日【鬼哭神火山】で過こす羽目になった。

理由は、迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》で名剣魔剣の類や様々な【魔術書】などを買い集めていたブラ里さんとスペ星さん達が、治療活動中のセイ治くんとクギ芽ちゃん、そして布教活動が一旦落ち着いたアイ腐ちゃんから、俺達が何をしているのか詳細に聞き出したからだ。

つまり、ブラ里さんとスペ星さんも暴れたかった、という事である。

俺から誘わなかったのは、皆がそれぞれ楽しそうにしていたからなのだが、こんな反応があるなら最初から連れてくれば良かった、と反省。

そして、早速到着してやる気満々のブラ里さんとスペ星さんのコンビと訓練を行った。

二鬼のスタイルからして、前衛は当然ブラ里さんであり、後衛はスペ星さんだ。ブラ里さんの種族は【血剣軍女帝・亜種】となっている。外見はそこまで変わっていない。鬼珠が増えているいたり、以前よりも凛々しくなっていたりなど細かい変化はあるが、以前と変わらず敵の鮮血で己の身体を濡らしながら戦う、全身鎧を装備した赤い剣鬼だ。

ただ、外見的特徴で一点だけ、大きく変わった部分があった。

それが、彼女の背面である。まるで天使の翼のようでありながら、鮮やかな血で出来た鋭利な剣翼が生えているのだ。以前もよく背後に無数の血剣を浮かべていたが、あれは多数の敵を屠り、その血を剣と化していたのであり、普段からそれを維持する事はできなかった。血という材料を貯蔵し、持ち運ぶのが困難だったからだ。

だが【血剣軍女帝】になった事で、背部に血で出来た剣翼というタンクを獲得し、貯蔵可能となった。その恩恵によって、敵を無数に殺してからでなくても、最大の攻撃を行使できる。

そして、同時に精密操作が可能な血剣の最大数は数百以上——振り回す程度の単純操作なら数千——に達するらしいので、ブラ里さんが率いる血剣の剣軍は想像するだに厄介だ。

加えてそもそも高かった身体能力がより強化され、剣技にも磨きがかかった為に、戦闘スタイルが変化していた。以前は右手にロングソード型の魔剣【鮮血皇女】を持ちつつ、血剣を操作するスタイルだったが、今は左手に新しく購入したらしいロングソード型の魔剣【屍斬血狩】を装備して、双剣使いになっている。二振りの魔剣と無数の血剣が織り成す濁流のような連続攻撃を捌くとなると、中々苦戦させられそうである。

ちなみに、カナ美ちゃんと血の操作権力を争うと、カナ美ちゃんに軍配が上がるようだ。ただ完全に我が物とする事はできず、うぞうぞと中途半端に動かすのが限界だったので、そこまで力に差がある訳ではないらしい。

一方、後衛であるスぺ星さんは【煌魔星女王・亜種】という種族に【存在進化】していた。それに伴い、鬼珠が増えたなどの細かい変化に加え、恒星の周りを公転する惑星のように、彼女の身体を中心として虹色の球体が八個回遊するようになった。

少し調べてみたがこの球体は鬼珠の亜種というか、似て非なるモノであるらしく、鋼鉄製のナイ

フでは傷一つつかなかった。ミスラル製の物でようやく薄らと、あるような傷がつく程度なので、結構な硬度なのは間違いない。銀腕を変形させて傷をつけてみたが、その傷も十数分で治っていた。

これらは思考するだけで操作できるらしく、高速回転して攻撃を弾く、至近距離に迫った敵に強力な打撃を与えて粉砕する、という風に扱えるかと判明した。

しかしその本質は、スぺ星さんが魔術を行使する際の補助能力にある。この八個の球体を触媒にすれば、本来なら相応の手間を必要とする高階梯魔術でも簡単に使用できるし、しかも自動的に八倍の威力になるという桁違いの能力を秘めていたのだ。こと魔術の行使に関しては団内随一となったスぺ星さんであるが、それと引き換えに身体能力はセイ治くん以下に落ち込んだ。

致命的な魔術の弾幕を掻い潜り、八個の球体を避けて攻撃を当てられれば、【大鬼】程度の身体能力でも一瞬で気絶させられるだろう。以前ならそんな事もなかったらうに。

まあ、今の彼女に近づくのは、断崖絶壁を飛び降りて群がる飛行型モンスターを蹴散らし、着地してから今度はその断崖絶壁を登り、再び飛行型モンスター達を蹴散らしつつ元の地点にまで無傷で生還する事くらい困難な訳だが。

ともかく、そんな二鬼と訓練してみた。

前衛であるブラ里さんに足止めされると、死角から馬鹿げた威力と数の魔術が飛んでくる。